

生活改善運動の映像にみる女性像

亘 純 吉*

The Visual Image of Women Recorded on Move Films and Slides Shows That Have Recorded The Movement for the Improvement of Living in the Post-World War II Era

Junkichi WATARI*

Abstract

The aim of this study is to consider the visual image of analyze “the image of women recorded on move films and slide shows” that have recorded the Movement for the Improvement of Living in the post-World War II Era from the view of cultural anthropology.

To summarize :

1. The Movement for the Improvement of Living raised the status and increased the influence of women in the family through the specific experiences of developing products such as the improved Kamado (a cooking stove), at the same time had them aware of the power of associated movements united by the new values.
2. The films and slides shows used in the Movement for the Improvement of Living as well as the films that recorded the movement are both produced under the ideology of the modern western rationalism. The movement is an expression of the paradigm that “social participation” and “self-discovery” relate strongly to each other.
3. The Movement for Improvement of Living had not turned its attention to the socio-political structure that had produced poverty in farm and mountain villages. The movement failed to recognize the situation that the villages were marginalized and trapped in poverty, and it did not involve the ideological liberation toward the social reform within itself. Therefore, the movement could not bear a possibility to become a popular social movement that could change the situation of the villages.

はじめに

第二次世界大戦後のいわゆる戦後民主化運動は、農林省の農業改良普及事業、厚生省による保健衛生、栄養改善、文部省による公民館を中心とした社会教育、労働省による婦人活動などの取り組みがなされた。農村でその中核を担ったのが農林省所管の生活改善運動であった。この運動は戦後

*人文学部 映像コミュニケーション学科

の三大農業政策といわれた農地解放、農業共同組合、農業改良普及事業の一つである農業改良普及事業の一環として行われた。1948（昭和23）年7月15日農業改良助長法の制定によって、本格的な取り組みがはじまり、農業技術と生活改善という二つの側面からアプローチがなされた。前者は、農業生産技術の向上と農業経営の確立をめざし、後者は、生活の改善に力点が置かれた。

農業技術普及と農村の組織化をととして生産の拡大を目指した農村の「開発」あるいは「発展」は、明治時代にはじまる農事巡回教師制度による農村への国家的な取り組みから農会、農業会、農山村漁村経済更生運動などの歴史的な経緯をたどり、戦後の改善事業へとむかった^{注1)}。活動の政治的社会的な位置づけは異なるが、そこにはつねに、近代科学へ信奉や西洋近代合理主義の思想の受容に対する葛藤が見てとれる。その社会的文化的な変容は、視覚的には生活スタイルの変化として記憶されるが、その根底にある価値観、思想とは何かを抜きには語ることはできない。

今日、世界が対峙している課題の一つに「開発」がある。一般に開発援助と言われるものであるが、世界中に増殖した市場経済やグローバリゼーションと向かいあう伝統文化とその思想、換言するなら共通化と地域化、普遍化と個別化という相反するベクトルが同時的あるいは重層的に混在するという矛盾を抱えている。それはいわゆる先進国が低開発とみなしている社会に援助するという枠にとどまらず、地球規模の環境問題、人口問題、紛争など人類の生存を問う問題系の議論と共通するものである。

近年「開発」の現場では、開発する側、開発される側という二項対立の枠組みでは貧困削減に代表される開発途上国が抱える問題を解決することができず、行き詰まりの様相を呈していた。そこで議論されたのが住民を主体とし、ボトムアップの形で問題解決を試みる参加型開発であった。1990年を前後する時期から、戦後我が国の生活改善事業で展開された啓発の手法が参加型開発の視点から見直され、途上国の農村地域が直面する貧困やそこから抜けだすための生活向上などに係る活動のヒントとして議論されるようになった〔国際協力事業団、1992、1993、1994〕。この流れのなか佐藤寛〔2002：pp. 16-17〕は生活改善運動の社会的文化的な側面について、GHQによる外部から持ち込まれた目標「民主化」を受容した日本関係者がこれを咀嚼し日本の文化な対応、すなわち土着化した活動を展開したとの見解をしめし、この運動の普遍的要因と個別的要因を検討して開発の現場における再現性の議論を推し進めた。開発の分野で新しい方向性をもたらした参加型開発の議論が活発になる中で、生活改善運動は見直され、この運動を支えた生活改良普及員の活動事例（啓発やファシリテーションの手法など）が分析され、開発現場での応用が試みられた^{注2)}。

本論は、生活改善運動で展開されてきたファシリテーション手法や住民参加の活動の分析を議論するものではない。農業改良普及事業が「西洋近代」を支える思想の一つである「主体性」を戦後の日本の農村社会がいかにとらえたかという文化運動として位置づけ、その思想を映像はどのように記録したかを考察するものである。ここでは、第二次世界大戦を契機に日本の農村が「民主主義」の標語のもとに展開した生活改善運動で利活用された映像資料（映画、スライド）が、農村の近代化をどのような意図をもって語ってきたか、とそこに見る映像表現の虚像と実像を「農業・農民・農村」の系から明らかにするものである。議論では、この生活改善運動の担い手の多くが「農村婦人」であったことを特色としていたことから、女性の活動を記録した映像資料を中心に展開したい。

2 映像資料の社会的背景

農業改良普及事業は、戦後の農政改革にともなう新しい政策として制定された農業改良助長法のもと、その一步を踏みだした。農政は、農地改革、農業協同組合、農業改良普及事業を軸として展開され、民主化された農村をめざした。具体的な施策として、農業改良助長法、農業協同組合法(1947(昭和22)年11月19日制定)をもとに「自立し考える農民」「安定した農業経営」「開かれた農村」をめざした。また、民主化政策は、教育基本法(1947(昭和22)年3月31日制定)、社会教育法(1949(昭和24)年6月10日制定)、地域保健法(1947(昭和22)年9月5日)など法令のよりどころとなる行政組織および関係諸機関でも取り組みがなされ、相互に関係しつつ強化されていった。

戦後の農業は、食糧増産が緊急の課題であった。1949(昭和24)年には、農業改良助長法の制定を受けて改良普及員が2カ町村に1名程度の割合で配置された。この時代の農業改良は、稲作技術を主体とする技術普及活動が核となっており、農業改良普及員がその任にあたった。農業改良普及員は、試験研究機関が推奨した稲作の栽培法(肥料設計、農薬の取り扱いを含む)と近代的農業経営とは何かを農業者に紹介、指導し、生産性の向上に寄与した。

これと並行して生活水準の改善をめざした社会的な取り組みも活動をはじめた。その任は生活改良普及員が担当したが、活動の方向性は模索状態であった。その中で台所改善、農繁期の食改善、休息のとり方など試行錯誤の取り組みがなされた。生活改善の活動は、徐々にその形を整え、農業者や集落に密着して広く展開されはじめたのは、1959(昭和34)年を過ぎた頃からで、各地に農事研究会、青少年クラブ、婦人グループが誕生し、生活改良普及員の活動が活発になった。具体的には、改良かまど、台所改善などの取り組みをツールとして活動がなされた。

戦後日本農業は、社会経済の変化に呼応したいくつかの転換点があった。農地解放を経て食糧増産に努めた時代が約10年続いた。そして経済復興、高度経済成長に転じた1950年中葉から農業人口は都市部へと流れでた。農業基本法が1961(昭和36)年に成立したが稲作を中心とした農業経営に大きな変化はなかった。しかし、生活スタイルの変化とともに米の消費は減少し、1970年に米の減反政策が実施され農業経営は政策に翻弄される。本論で扱う映像資料は、生活改善に係わる普及事業が全国的に活発になる過程で、減反政策が実施されるまでの生活改善運動を扱ったもので、表題の「農村生活改善運動の映像にみる女性像」は、この運動が全国的に展開され、広がってゆく1960年代までに制作された映像資料をもとに検証をすすめてゆくものである。

I 農村婦人のイメージ

映像資料を検討する前に農村婦人がどのようなイメージを持って語られていたかを労働省婦人少年局編『農村婦人の生活』と(長野県)下高井教育会社会調査委員会編『奥信濃の農村婦人』の資料から概観してみたい。前者が行政サイド、後者が在野の視点からとらえているという特色がある。

1 調査資料：労働省婦人少年局編『農村婦人の生活』(1952)で分析された女性像

1952(昭和27)年当時、婦人参政権の確立や労働基準法など法的整備や労働組合組織など拡大に伴い都市部の家庭婦人あるいは労働婦人は、女性としての地位を次第に確立してきた。これと比較して農村婦人の生活は、「遅れている」との認識があった。労働省婦人少年局が婦人関係資料シリー

ズの調査資料 NO. 7としてまとめた『農村婦人の生活』は、農業経営の形態、村の地理学位置、都市部と関係性を留意し、調査対象地域を設定しており、その当時の女性の地位と役割を概観するための示唆に富む資料を提供している。この調査は総司令部民間情報局社会調査課が当初から計画実施に参画しており、占領行政の成果あるいは進展をはかる意図が潜んでいることは否めない。この調査は、労働省の所管で行われたもので、社会学的な視点から、農業経営の形態の異なる5地域（表1）を対象に、農村婦人の実情を1）村の社会構造および農業経営に占める婦人の割合、2）家庭における婦人の地位、3）農村婦人の生活意識から、農村婦人が置かれている実像を描きだそうとしたものである。

報告書の第2部では、「農村婦人の生活」（結果の概要）としてまとめられている。地域による差異が認められるものの農村婦人の置かれていた認識には共通した傾向があった。事例分析で指摘された事項は、以下のようにまとめられる〔労働省婦人少年局、1952：pp. 9-22〕。なお、調査農家数499でその内訳は岩手県田野畑村68、山形県大和村150、群馬県額部村108、愛知県春日村85、岡山県常盤村88である。

表1 『農村婦人の生活』（1952）の調査地

農業経営形態	地域概略	調査地	現在の行政区
単作水田地帯	山形庄内平野	山形県東田川郡大和村	庄内町
二毛作水田地帯	岡山水田地帯	岡山県都窪郡常盤村	総社市
養蚕地帯	群馬山間部	群馬県甘楽郡額部村	富岡市
商業的蔬菜栽培	愛知名古屋近郊	愛知県西春日井郡春日村	清須市
山間畑作	岩手山村	岩手県下閉伊郡田野畑村	田野畑村

筆者加筆修正

- 1）農業に従事している男女比は、5ヶ村平均で女性が多く、農業が女性の労働力によって支えられていた。その傾向は、男性が家計を維持してゆくために農業外の収入を求めての出稼ぎ、山林労働に従事する傾向のあるところほど顕著である。しかし、農業経営への発言権はないに等しい〔同掲書 p. 9〕。
- 2）労働はつらいが仕事を楽にするには、働き手を増やす、機械や牛馬を使用すればよいとの意見が支配的で、共同作業には大半の婦人が反対であった。共同化は労働評価に対する不満と自由の束縛から反対を唱える者が半数を占め、肯定する者は農繁期の共同化のみに限定される傾向があった〔同掲書 p. 10〕。
- 3）農村婦人は、結婚後、家に縛られ、隣接する集落でさえ積極的な交流がなく、観光として県外への旅行を経験しているものはほとんどいない。そのため集落内での集まりは世間話に興じる楽しみの時間であった。集団は、伝統的な講（念仏講、地藏講、御待合講など）、戦時体制を支えた大日本婦人会の流れをくむ婦人会それに青年会などがあった。婦人会は、基本的に各家（世帯）を代表する1名が加入し運営されたが、グループの長や役員の選出には伝統的な経済的社会的な構造、すなわち家の格が作用していた。婦人会や講への参加は、寄り合い後の持

ちによる食事を囲んでの楽しみがあるからで、労働や家から解放される非日常的な時空間であった。そこでは、人間関係を損なわない関係性の再確認がなされていた。なお、報告書では、生活改善グループや農業協同組合の婦人部会の活動が次第に活発化しているとしつつも、農協に女性が加入できることや、その事業の内容を知らない割合が全体平均で50%を越えていた〔同掲書 pp. 19-20〕。

4) 個人の生活で楽しみあるいは生きがいにあたることは、健康で生き続けること、子どもの成長、実家に帰る、裁縫である。ラジオの所有は73%であったが、娯楽がないとの分析がなされている。「娯楽としてあげるにはあまりに生活的なものばかりで、これらをさえたのしみとする農村生活は、そのまま文化の低さをしめしているといえるであろう。」との記述がある〔同掲書 p. 12〕。

5) 物質文化の改善は、地域により差異がみられた。生活の基本となる食では、山間地で食糧事情の厳しい状況が見て取れる。配給制度になってから岩手県山村では日常の食事では稗：麦：米＝3.5：3.5：3で炊きこまれ、正月に米を食べることを楽しみとしてあげている。群馬県山間部の村では3度に1度キリコミ煮込みうどんを食べている。生活インフラでは、群馬では村民の努力により水道が設置され、岡山ではかまどの改善から便所の改良さらには子供部屋を作るなど取り組みが萌芽している〔同掲書 p. 13〕。

6) 性別による参政権の差別がなくなったなか、1950（昭和25）年6月の参議院選挙の投票率の資料を引いて分析している。女性の投票率が37%の田野畑村（岩手県）を除いて他の集落は全国平均投票66.7%を越えているが、候補者の選択は家族との相談（27%）人に勧められた者（4%）で投票を自身の判断で行ったかは言い難い、と述べている。ちなみに5ヶ村に女性議員は誰も選出されていない〔同掲書 p. 21〕。

男女同権、参政権は戦後民主化のスローガンは普及しているが、被選挙権、均分相続、結婚離婚の自由などについて語る女性は極めて少ないと報告している。しかし、一部の村落では婦人の集会への積極的な参加、そこでの積極的な発言が見られ、婦人の地位の向上が認められた。とくに都市近郊農村の春日村（愛知県）では女子の集会参加率が高かった〔同掲書 p. 22〕。

2 調査資料：（長野県）下高井教育会社会調査委員会編『奥信濃の農村婦人』で分析された女性像

『奥信濃の農村婦人』は下高井郡教育委員会が組織した社会調査委員会が行った高杜山を取り巻く現長野県中野市倭（旧倭村）、延徳（旧延徳村）、中野市街および同市近郊農村の4地域を対象におこなった調査である。調査の目的は、学校教育と家族と地域による社会化を包括的に理解し学校教育の進展を図ることことに置かれていた。そこでは、農村の抱える経済を中心と生活様式の理解なくして子供の教育を進めることが難しいとの認識に立っている。とくに子供に影響力のある主婦の思考様式を知ることの重要性が強調されている。調査は社会学・民俗学的な視点からなされている。なお、本書は、正確な発行年次が欠落しているが、あとがきに付記されている社会調査委員会委員名と序文の記述から類推すると1961～1963（昭和36～38）年の間に調査が行われ、1964年に出版されたものの類推できる。

本書を資料として取り上げたのは、生活改善運動とは一線を画した地域の学校の先生を中心とし

た調査で、前述した『農村婦人の生活』が行政レベルでの調査であったのに対し、地域性が色濃い
在野の郷土調査であったからである。

この調査は、長野県中野市市部から、その近郊農村（延徳集落）、中山間地農村（倭集落）、山間
地農村を比較し報告がなされている。ここでは比較的中野市街から距離的にやや離れている中山間
地の農村（倭集落）資料を中心とし農村婦人の家計維持と発言力について概観する。なお、必要に
応じて中野市街に比較的近い近郊農村（延徳集落）資料も扱うことにする。

『奥信濃の農村婦人』[pp.2-3]では農村部（倭と延徳集落）の生活が以下のように記述分析さ
れている。

調査は農村婦人を社会的視点から7項目設定している。これと並行して各項に対応する習俗調
査がなされている。

- 1) 婦人と家計問題
- 2) 家族労働者としての婦人
- 3) 妻の座としての権限
- 4) 信仰集団の中の婦人
- 5) 近隣社会の中にある婦人の機能
- 6) マケ集団における婦人の位置
- 7) 婦人の理想像

さらに習俗調査と意識調査を前7項とクロスさせ調査している。以下は意識調査の項目である。

- 1) 婦人相互の交渉上派生する場面（隣近所との交際：贈答、本分家との交際：労働・贈答・会
合）
- 2) 戸主対主婦の意見交流の場面（家計、子供の躾、労働、姑舅観）
- 3) 姑舅対主婦の交流上の派生問題（家計、子供の躾、労働、戸主観）
- 4) 子供の母親についての見方（母の目線）
- 5) 妻の座についての意識（衣食住、進学、理想的人物、将来への希望と不満、娘に対する結婚
観、労働と育児、実家／仲人との交渉、妻の所有物、講に係る労働と贈答）
- 6) 農事に関しての主婦の位置（農事暦、日課表、生産意識）

『奥信濃の農村婦人』では、上述したように農村部の婦人の労働観、生活観、社会観に関する調
査の詳細な記録が残っている。それらを要約すると以下のとおりである。

- 1) 家計は、夫あるいは舅、あるいは姑が支配しており基本的に家計の切り盛りを嫁にまかすこ
とはない傾向が指摘されている。嫁が家計の差配が出来るようになるには、結婚後10年位と姑
が亡くなってからが多く、集計では約60%をしめている。嫁の立場では日常必要となる出費（子
供の物、自分の物、社交（義理）などの小額な出費）いわゆる小遣いも舅－夫の流れの中で渡
されるもので、小額でありそれも自由に使うのがはばかれたと記録されている。報告書では
「時代の流れは女性の立場を相当優位にさせては来ているが、事経済に関しては嫁の座におい
ては決して好遇されていない。」と述べ、補填的な意味合いでの「へそくり」づくりにも触れ
ている [同掲書 pp. 12-13]。
- 2) 「へそくり」は、農産物の売却益（山羊の乳（姑と折半）、鶏卵、キズのある果物、アンゴラ

兎の毛、メン羊の毛、雑穀類、豚（一部）、実家から贈与、賃金労働（農作業の手伝い、頼まれ物としての洋裁、他家での労賃の半分、農閑期の出稼ぎ）、自家生産物の売却益（油の売上の一升分、縄ないの一玉、杞柳の編み賃）などを婦人自らの努力によって得ているが、実家から贈与を除けば家族はその所在を知っており、「へそくり」仕事そのものは生活の一部に組み入れられている [同掲書 pp. 11-13]。

- 3) 家計の運営は、多くが舅、姑、夫に多くが支配されている。発言権も同様な傾向が見られる。調査では「電気洗濯機やテレビなどの大金の品物を買おうとする場合、誰が一番強く自分の考えを主張するか」という主旨で設問を行っている。新しい品物は舅より夫、姑より嫁のほうが発言力があるが、嫁のそれは倭集落（総数67）では7%に過ぎない。しかし、報告書では嫁の意見が夫を動かし、家の中で相談して決めるとの回答とを加味するならば嫁の意見も一概に小さいとは言い難いことを指摘している。また、婿取りの家においては、嫁の発言権は強いとの指摘もあり、家族と婚姻のありかたとも関係する [同掲書 pp. 14-16]。

電気洗濯機などの購入にさいし、自分（嫁の立場）の意に反した場合の思考のパターンを倭集落の事例で分析している。それによると「なんとか実現したいと心が残る不満型」「あきらめてしまう諦念型」「家全体を考えて道をさぐる妥当型」のパターンが見られるとしている。その中で不満型は自己主張の強いもので後々まで交渉を継続する交渉継続型（20%）があり近代的な性格をもつ新しい潮流であると述べている。平均的には諦念型で伝統的な決め方に従うとする遺習型（20%）、夫尊重型（15%）女に決定権はないとする自己無力型（14%）の傾向が見て取れる。話し合いで決定するなら仕方がないとする相互理解型（17%）と最後は夫の力という夫依存型（12%）が妥協型としてあげられ「インテリ的な嫁」とのコメントが付されている。この資料は、個人が自己の主体性を明らかにする傾向が読み取れ家族経営の場にあった伝統的な家長支配の形態が変化してゆく姿が読みとれる [同掲書 pp. 14-15]。

- 4) 農村婦人の家計に係る意識が明瞭に表出するのが台所の改善であり、姑と嫁の係争は年齢によって対応は変化している。倭集落では、20代は年寄りが反対してもよいことは実行する実力先行型とこれまでの意思決定のあり方に従う遺習尊重型の二つの思考様式が見られる。30代では夫を巻き込んだ共同解決型に、40代では諦めが表出し、50代は自身が姑の立場に立ち決断に係り自己を主張するように変化してゆくが、台所改善には現状を変えて行こうとする新たな考え方と、伝統的な社会の枠組み、家のしきたりを維持してゆこうとする考え方が表裏一体にある [同掲書 pp. 15-16]。

延徳集落も同様な傾向がみられるが30代は倭集落の40代に見られた多様な対応がみられ、集落間で若干の違いが認められる。その原因は家族間で波風を立てないで家族の経営がなされる傾向があると分析している [同掲書 pp. 24-26]。

なお、倭集落485戸中20戸が、延徳集落では357戸中79戸が改良かまどを設置している [同掲書 p. 7、表：食住機材の調査]。

- 5) 報告書は、農村婦人が仮に経済的に余裕ができれば衣食住のどの要素に投入するかについても触れている。両集落とも小額であれば衣で額が大きくなるにつれて食に、さらに住へと変化する傾向がある。農業経営のあり方は大きく変えることはないが、近隣の家がオートバイを購

入すれば無理して購入したり、風呂場の改善が流行しだすなど新しくものを人に負けじと取り入れる家風がある、と分析している〔同掲書 pp. 17-18〕。

- 6) 家族労働者としての婦人は、睡眠時間が倭集落では農繁期で5時間20分平日でも6時間30分、地域によっては農繁期4時間台しか確保されていない状況であり、家事と農事に明け暮れるという状況におかれている。このような中で作付けや栽培管理をふくめた仕事の割り振りに係る発言権は、新種の導入、農薬の取り扱い、農業機械の導入などの新しい技術への対応が求められた結果、対応能力のある若い世代に移りつつある〔同掲書 pp. 21-22〕。

- 7) 農村婦人は、各世代とも集落に留まり家事、子育て、農事に振り回されている傾向がある。農業労働の理想像は、「主人と一緒に働く」「農仕事は主人で主婦は家事だけ」「力仕事は主人、主婦は軽仕事」という農事の現実を踏まえた夢を抱いている。倭集落では、作付けの改善については現状維持あるいはわからないとかいという意識がつよい。しかし農家が豊かになるには、30代が共同化、40代が土地改良、50代が多角経営を取り入れることによって可能性が生まれるとの意見を持っている。そこには年代によって方向性が異なるが、平均して共同化の必要性を認識している。しかし、30代の共同化への期待と40代のそれとは微妙に異なり、50代では自身の力での経営に気持ちが動いている。報告書では「共同化もよいが、まだ日本の現状では早く、自分の所有地のところはよくやるが、人の家の土地になると仕事が雑になる。」との記述があり、共同化についての意識は年齢によって変異があることが分かる〔同掲書 pp. 24-25〕。

以上、労働省婦人少年局編『農村婦人の生活』と（長野県）下高井教育会社会調査委員会編『奥信濃の農村婦人』の2資料は、調査の目的、方法、調査地、日時が異なり厳密な比較はできないことは明らかである。高度経済成長の初期の段階（1960年代、東京オリンピックの開催前後）までは、農事の多くが農村婦人の労働によって支えられているが、農業経営に関する発言力は弱いこと、家族内での決断は舅－夫によってなされること、家事・農事全般こなすため一日の時間的な余裕はないこと、地域を越えての移動や旅は稀な出来事であること、家庭によっては舅姑の伝統的な生活様式を守ろうとする考え方と新しい考え方との間に軋轢が生じることなど共通した調査結果として語られ、当時の農村婦人は伝統的な生活観、社会観が強いことが強調されている。しかし、年齢の進行にともなう家族内の地位と役割、婿取りなど婚姻の形態違い、息子を介した地位の変化など婦人の地位と役割などは世代、社会的環境によって動態的な様相を見せており、婦人の地位と役割を議論するにはコンテキストのなかで読み取る必要も示唆している。とくに、農作業の共同化は、多くの事例で世代によって異なる回答をよせ、一概に共同化に賛成しているわけではない。例えば、果樹、蔬菜で新たに導入しようとする品種がある場合や農薬の使用には、それまでの経験では対応できない状況に置かれた場合には、組織的な対応の必要性を認めるなどケースバイケースで判断している傾向がある。農村婦人の置かれた立場は多様であり、その多様性の中に新たな考えを受容する素地がある。農村婦人が「おくられている」とする画一的なとらえ方では社会の動態的な動きを理解することが難しくなる。社会を変える活動は一個人の力によることがおおく、生活改善運動の草創期の活動はこの点からの再考が望まれる。しかし、一般的なとらえかたは、2資料の調査結果がまとめているように農村婦人が社会的、経済的、政治的に後進的な位置におかれているとされた。この認識は、生活改善運動の底流につねにあった。

3 農業技術の変化と生活改善

人間は動物ゆえに、自然のエネルギーを摂取しなければ生存できない。生きてゆくには自然を利活用して行くしかない。人間が自ら生きるための糧を生産する農業は、光合成によって生みだされるエネルギーが源である。それを直接的に利用する農耕と、動物を経由して摂取する牧畜とに大別できる。両者は、自然環境にしたがって独自の組み合わせをなし自然の恵を享受してきた。それは、地域性、個性の強い対応であり、国や地域の歴史や文化の影響を受けつつ独自の作付けと経営体系をもってきた。

農業は作物や家畜が原料や労働の対象ではなく生きた生産装置であり、土地は生育基盤である。換言するなら農業では作物や家畜のよりよい育成のための環境条件と生育制御を目的とする労働手段とその知識の体系であり、作物や家畜の生命活動あるいは生活過程で生産する物質を利活用しているにすぎない。そのため農業の生産はすべてを人間が管理することができない。生産限界があり、近代が唱える生産効率や収益最大化の原理が機能しない価値観が働く場合が多い。さらに農業生産は技能のしめる比重が大きく、個人の経験則と自然に対する洞察力が生産を左右する。

農業における普遍性は、近代科学いわゆる農学の領域からなされ、技術、社会、信仰などが相互に関連する農業体系を、例えば栽培植物、気候、生物環境、土壌環境という要素に細分化してとらえ、近代科学のもつ普遍性のなかに組み込んだ。そして細分化された技術的要素に肥料、農薬、トラクターなどの人工のものとの入れかわりを可能とした。近代科学が農業生産性の向上に寄与したことは間違えないことであるが、従来の農業生産で価値と見なされてきた無形の「心こめて」「勤勉」などの労働に対する価値観は近代合理の思想の前では価値とはみなされなかった。

生活改善運動が展開される中で農業経営に大きなインパクトを与えた農業技術は、農業機械（耕耘機、田植え機）導入と除草剤を含む農薬の使用である。いずれも1960年代中葉には全国的に広がった。農業生産の現場に人間や牛馬という自然エネルギーをもって農業労働を行うことから、人間が管理する人工のエネルギーや人間が作りだした化学物質をもって農業経営にあたるようになったと言える。自然から切り離され、一見するとあたかも人間が科学の恩恵をもって農業生産をコントロールできるような時代がおとずれる日が近いと思うことを可能とした時代のさきがけでもあった。それは「近代」の思想をささえる人間の思考こそが世界を認識するとする人間中心主義が科学の力を借りて農業の現場に浸透していったことを意味する。

結果、農業経営は工業生産に生産資材の多くを依存するようになり、工業資本の視点からは市場としての農村を強く意識してきた。農業機械展、種苗交換会での耕耘機、トラクターのデモンストレーションや電力会社による電力需要の喚起、家庭電化製品や建築資材の普及活動などが積極的に展開された。例えば東北電力の企画で制作された映画には『新しい米づくり』『この雪の下に』、板硝子協会のものには映画『窓ひらく』や生活改善運動で活用されたスライド『或る農家の記録』『住まいを明るく暖かく』『明るい居間』、また東芝が協力した『電気冷蔵庫の知識』などは市場としての農村の存在を意識していることが見え隠れする。



写真1 農機具展示会
『NHK20世紀の映像』より



写真2 『新しい米づくり』(1955) 東京シネマ

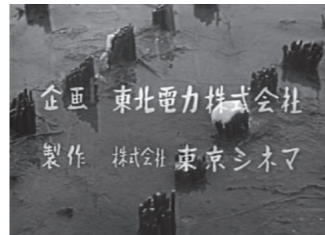
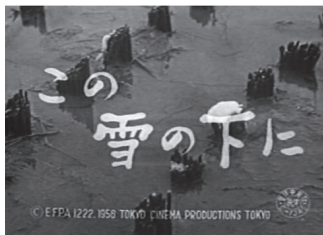


写真3 『この雪の下に』(1956) 東京シネマ



写真4 『窓ひらく』(1958) 東京シネマ

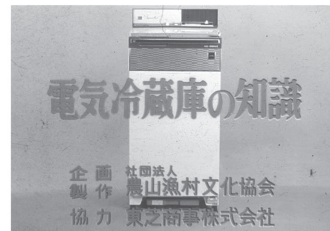
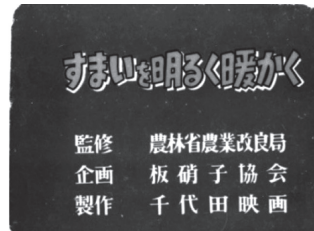


写真5 生活改善に利用されたスライドと企業

水田稲作農耕を核とする農業生産は、技術的には人力と畜力を基本とする伝統的な農法によって経営されてきたが、エンジン、電気モータという新たな技術を導入した生産様式を受容した。社会的には、農地解放によって地主制度という農村を支配してきた社会構造に「個」を主張することを可能とする小規模な自作農が生まれ、経営に対する自主性あるいは主体性からの視点も要求されるようになった。上述した2冊の報告書は、農村の農地解放における社会的な変容と農業生産における技術的変容を現場の村々でどのように再編していったかの初期の資料でもある。そこには、戦後民主化政策という外部からの刺激を受け農村の社会的文化的な変容が地域と程度の差異があるに

でも萌芽していたことが読み取れる。農村における思想の再編は、いわゆる高度経済成長を支えた出稼ぎや若年層の都会への流出など急激な市場化、高度経済成長の時代の中で具体的な方向を描けず市場化の波に翻弄され、結果的には農村社会が都市の外延部におかれるという状況を変えるまでにいたっていない。日本の農業像を語る国民的な議論を生み出すことはなかった。

農村では、伝統的な人間関係は濃密なまま、近代の恩恵を受けて生活の豊かさを求める動きがあったことは確かである。しかし、この豊かさを生み出したのは農業生産と切り離された賃金労働に負うところが多く、地域によって時間的に前後するものの、出稼ぎや集団就職による若年層の都会への転出の事態を招くことになる。

戦後の生活改善運動を主題とする映画やスライドなどの映像資料は、伝統的な農村社会を支えてきた社会組織とは異なる新しい取り組みを可能とする運動体としての組織をいかに作り上げていったかを啓発資料または記録として取り上げている。映像では、生活改善運動が求める新しい枠組みをもった組織の登場ならびに組織の活動過程が描かれている。その背景には主体性をもった個々人が登場し、それこそが戦後「民主主義」思想運動が醸造したものとして描かれた。言い換えるなら「近代」が持つ価値の体系を映像化する作業でもあった。次章では、具体的な作品を事例にこのことを検証したい。

Ⅱ 生活改善運動に関する映像資料

1 新生活モデル町村 色部落のくらしの事例（スライド）

農村の生活改善運動は、「民主的」「近代化」といふフレーズを内に秘め、新しい生活とは何かを模索した。各地で行われた活動のなかで、住民それも女性グループの取り組みがボトムアップ的な過程を経て生活改善の成果が実ったとみなされた事例は、スライド、映像フィルムに収められ、生活改良普及員の啓発活動に利用された。本章で事例として取り上げる表題「新生活モデル町村 一色部落のくらし」は、愛知県八名郡七郷村一色部落、現愛知県新城市七郷一色にある山村で展開された「新生活」運動で1953年度には総理大臣賞を獲得している。スライドは、この活動をモデルにして制作されたもので、全41景で「普及員の方達のために」という解説書が添付されている。

生活改善運動では、農業改良の主体者は農民で、彼らの能力を高める啓発する農業改良普及員あるいは生活改良普及員が助言し、農業の発展と農家生活の向上をはかる、という枠組みのもとに活動が展開されてきた。しかし、後述するが、その当時の農民が置かれていた問題の原因－結果をとらえ、その状況から抜け出す対策、その結果もたらされる展望に至る語り方は情緒的であったと言わざるをえない。

事例のスライドは、台所の改善をととして生活の改善の必要性和その過程を説いている。そこでは、伝統／封建的因習に縛られた生活態度が、前近代的な生活環境に住民を押し止めている、という認識のもとにストーリーが展開されている。すなわち、伝統／封建的因習に縛られた生活態度こそが、民主的な組織運営の未発達、機能不全、そして近代的あるいは合理的な思考を生活改善に取

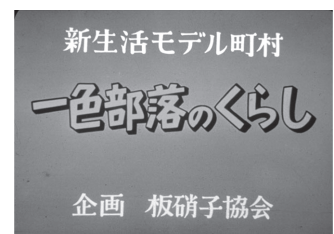


写真6 スライド「新生活モデル町村 一色部落のくらし」トップページ

り組む積極性や知識の不足を招いているとした。前近代的な生活態度・貧困という図式で状況をとらえている。この状況を打開するためには、個々の農民が主体性をもって物事に対応できる能力を、指導者が啓発し高めることによって、可能になり、農民が自らの生活の改善に積極的に係る道ができるととした。農民への啓発の過程は、個々人の農民の精神世界の拡大に寄与し、生活水準のみならず、社会レベルの向上をもたらすとの展望を語りかけている。換言するなら、教育的手法によって「自ら考え行動する、いわゆる自主的な農民」を育て、生活改善運動が進展することをめざしている。

その象徴的活動として「改良カマド」が取り上げられた。スライドでは、農村の停滞性は「伝統／封建的な因習に留まる」に根本的な問題が隠されているとし、それを解決する活動は、婦人の家事労働の中心にある台所におかれた。台所の改善によって婦人の家事労働を軽減し、生活に新たな選択肢を加え、個人ならびに家族の可能性を拡大するとの枠組みが見てとれる。普及員に向けた解説書には、問題の所在と原因との関係は、以下のように記述されている。

- (1) 私達の生活が暗いのは台所が暗いからだ
- (2) 生活がみじめなのは考える時間がないからだ
- (3) 生活が進歩しないのは封建的因習が強いからだ

上述の3項には、原因と結果の関係に論理的な対応は乏しく情緒的な表現であると言わざるをえない。封建的な枠組みに縛られた生活が「進歩」の思考の妨げになり、主体的な行動がとれないという図式が固定化されている。活動のねらいは個人の主体性の確立であるが、組織の運営上の確認事項は、地域の社会状況を反映し、下記のような個別的な関係性や相互作用への配慮がなされている。

- (1) 無理をしない計画で改善の仕方・程度を各家々の経済事情と計画にそうように心かげること
- (2) 計画は綿密にたてるよう心がけること
- (3) 人真似でなく充分理解の上実行に移すこと
- (4) 家族全員の協力の下に行うこと
- (5) 婦人の手と力とでをモットーにして自分の仕事という自覚のもとに、会の運営の民主化をはかり、できるだけ多くの役割を設け、責任を分担しあうこと
- (6) 助け合い、励し合い団結して落伍者のないよう努力すること

この一色集落の台所改善にかかわる農村社会学的な分析と検証は1956年に発刊された『台所改善よりみたる文化普及活動に関する調査』に詳しい。この報告書は、山形県西置賜郡鮎貝村（現：白鷹町）、茨城県久慈郡世喜村（大宮町に合併、現：常陸大宮市）、石川県羽咋郡堀松村（現：志賀町）、愛知県八名郡七郷村（南設楽郡鳳来町を経て、現：新城市）の台所改善の取り組みを調査し、農村の経済的、社会的、文化的な視点から分析がなされている。各村はこの運動を独自の視点から展開していったことが記述分析されている。

『台所改善よりみたる文化普及活動に関する調査』の「調査の趣旨」では、愛知県八名郡七郷村の活動事例を以下のように述べている。

七郷村（愛知県）は典型的な山村で、農業経営は極端に零細な半自給型を示し男子の大半が林業

賃労働に従事する第二兼業型の村である。本村の台所改善運動は一部落（一色）に於いて行われているにすぎないが、この部落では殆んど全戸が運動に参加し、運動領域も生活改善から他の生活領域に発展している。運動は、役場、改良普及員、公民館、農協等が積極的に援助するという形態をとっている。[家の光協会編1956：p.4]

1955年（昭和30年）4月1日の資料をもとに作成された資料によると一色部落は、零細な農業経営と林業労働によって成り立っている。主食の自給率は20%以下で農業による生活維持は困難で林業労働による収入なしには成り立たない。兼業率は95%で世帯数、人口は、1953年以降の木材不況の影響も受け1950年から1955年の5年間で10%の減少があった。

政治経済的には、農地解放では対象とならなかった山林を所有する山林地主および裕福な山持ち層が戦後も村人を林業労働者として雇用する林業経営を展開していた。この戦前からの「富み」の継承は、この村の政治、経済、社会に大きな変化をもたらすことはなく、山持ち層が村会議員、教育委員、農業委員、農協役員、役場収入、婦人会長など公職を長期わたって独占してきた。山林地主の婦人会長は戦前から20年間部落の婦人会長職に留まっていると記述されている。

この生活改善運動は、農業改良助長法を基に展開された運動で、婦人会を中心に部落ぐるみの取り組む「台所改善運動」として展開した。その背景には、この運動が婦人会長の強力な指導力によって推進されたこと、そして行政サイドの協力連携および指導が強力にバックアップしたことを特色としている。

前者の特色は、この会長が有力な山林地主の婦人であり、報告書が「煽動者、運動組織者として登場し、その強力な政治性と指導力をもって運動推進がなされた」と指摘しているように個人的な指導力、政治力に長けていたことは確かである。彼女には集落における経済的、政治的、社会的な階層性を含んだ基盤をもっていったことは否定できない[同掲書 pp 101-102]。したがって、戦後の民主化、婦人解放の運動過程で醸造された「自主性」によって運動そのものが個々人の自主性に基いて動いたわけではない。そこには農地解放の対象とならなかった山林を基盤とする経済体制と権威が保たれたまま活動が展開されていたと言えよう。報告書本文では「婦人会長指導力が、有数の山地地主婦人という特殊な権威を基盤とし、しかも運動展開を通じて、部落民の会長畏敬をさらにたかめていることは注目されなければならない。」との記述がなされ、さらにこの婦人会長の熱意がなければこの取り組み進展はありえなかったとも言いつけている[同掲書 p.4]。

後者の特色である行政との協力連携は、婦人会長の社会的立場と密接にかかわる。生活改善活動は、生活が困窮している家を含め部落全体を巻き込んだ運営がなされたが、この運動を提唱推進したのは、戦後愛知県の行政機関と民間農業協同組合によって運営された愛知県の農業復興会議が設立した生活改善対策委員会で、農家生活改善の基本構想と事業の展開を啓発が議論された。行政側は県の農業改良課－農業改良事務所、社会教育課－公民館が村役場を經由して普及員や公民館職員、そして彼らが村民に、運動主旨の啓発指導を行っている。改良普及員のこの投げかけに応じたのが婦人会長である。前述したようにこの婦人会長は山林地主の婦人であるが、旧高等女学校の卒業の高学歴者、いわゆる「インテリ」である。その意味では異人的な存在であると同時に村に住む内の人でもあった。さらに、その夫は部落随一の山林地主、材木商そして村長職（県議員に転身をはかるために辞職）や教育委員の経験者で婦人が活動する上で政治、経済上大きな力が背景にあり、

この婦人会活動が行政や農協の指導援助を受けやすい土壌があったことは推察できる〔同掲書 p. 95〕。このことは、生活改善事業の開始にあたり、行政の意図を明確にくみ、それを理解したうえで積極的に推進したといえる。そこには彼女の夫が、村会レベルの政治活動から県会議員レベルの政治活動を模索していたこととも関係していた可能性も否定しきれない。地域の社会的政治的構造がこの運動を強力に後押し、結果的にこの一色部落の生活改善運動は前述したように1953年度には総理大臣賞を受賞する。

2 窓ひらく：一つ的生活改善記録（映画）

映画『窓ひらく：一つ的生活改善記録』は、演出八木仁平、脚本吉見泰で東京シネマが1958年に制作した作品である。企画は、板ガラス協会で山梨県南巨摩郡増穂町東小林集落の「東小林生活改善クラブ」の運動をまとめた疑似ドキュメンタリー映画である。

＜映画概略＞

映画『窓ひらく』は、生活改善運動が婦人たちの活動によって支えられ、台所改善の費用を婦人の手で賄い、それを成功させた運動の過程をセミドキュメント風の作品にしたものである。

舞台となる東小林集落は、戸数70戸の農村で収穫が終わった秋からは働きざかりの男は出稼ぎに出るという現実が語られている。家の中では現金収入につながる養蚕のための道具モズ作りが紹介され、「農閑期」は文字の上では「閑」ではあるが遊んでいては食べられないと、ナレーションされる。



写真7 映画『窓ひらく』タイトル

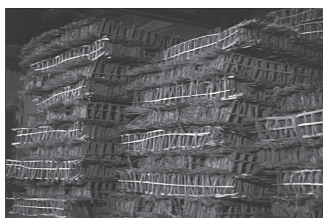


写真8 左：集落遠景、中：モズ 右：改善された台所

この集落では各家で台所の改善がなされたが、その歩みは段階的で水場とカマドの位置が離れていても、それも月日の隔たりとして理解する。「すべては一步一步すべては一つができて次である」「何から手をつけるかは人様々である」とナレーションは語る。

台所改善でまず窓を先につけた家が紹介される。台所の中では改良カマドを設置したのみで、の流し場はない。真っ暗だった土間に光をいれ、子どもたちに明るい部屋与えたことを喜びとする主婦が登場する。



写真9 左：台所に付随させた勉強空間、中：貯金箱 右：貯金の集計

これを可能とした村の取り組みである。クラブの婦人たちの手で5年継続した生活改善のための貯金活動が紹介される。各自の都合に合わせて日々貯金がなされ、この貯金を管理する村の婦人のところへ子どもや他の主婦が貯金箱をもって来る姿が映しだされる。村中を飛び回る青い貯金箱、貯金される小額のお金の成果が明日の何かに変わる、と信じて。少人数から始まった貯金活動は50人のグループになり、貯金箱の数も5台となる。

改善クラブのタマヨさんが登場する。タマヨさんは、窓のない暗い土間で七輪を使って調理する。煙の上がる七輪、思わず咳き込み、外にでるシーンが続く。日曜日の村の風景が挿入される。子どもたちの清掃活動、生活改善クラブが共同仕入れたものを販売。そこからあがるわずかな利益もクラブの貯金に入れるとのナレーション。



写真10 左：暗い台所、中：屋外の流し場 右：煙から逃げる婦人



写真11 左：共同購入の販売、中：右：出稼ぎから戻った夫

貯金箱を持って台所改善の終わった家に行くタマヨさん。夢の台所改善、日差しを浴びた台所、自宅の暗い台所との格差を実感。台所改善に向かって農作業、養鶏、苅編みに励む、それによってできた余裕を貯金箱に入れるタマヨさんの姿とシーンは続く。そして、台所改善のための貯金をクラブの世話役にたずねる姿が、貯金通帳には53,810円の文字。台所改善に必要な貯金ができ。その夜暗い台所との決別を夢み感慨にふける。

年の瀬、出稼ぎにでた人びとが電車から降りる。家に帰ってくる夫。新年を迎え、松がとれると

再び出稼ぎに行く。夫の賛同をえた台所改善。クラブの会合で台所改善を告げるタマヨさん。台所改善の次（電気のパン焼き釜）を提案する世話役。電気洗濯機との意見もでる。

台所改善の工事に着手する。まず、窓をとる土壁が壊され、暗かった土間に光が差し込み、タマヨさんの顔を照らす。窓の枠いれ、カマドの設置。戸棚の搬入、ガラス窓の製作、取り付けられたガラス窓、それに触れ、そっと開け閉めするタマヨさん。煙突のついたカマドで燃える火、煙突からでる煙、食卓、流し台、戸棚、うれしさあふれるタマヨさん。子どもたちもガラス戸から差し込む光の中で勉強する。生活改善クラブは、台所改善運動の次をめざした白菜作りの共同作業に取り組む姿で映画は終わる。



写真12 左：クラブの会合、中：土壁を壊す 右：光さす台所に立つ主人公の婦人



写真13 左：新しい台所、中：改良カマド 右：次の活動 野菜の共同栽培

台所改善運動に見る私益と公益

『窓ひらく』は東小林生活改善クラブが、台所改善を推進していくためにクラブあげての小額貯蓄運動を推進し、その成果をもとに台所改善にいたった道程と、今、台所改善に取り組んでいる婦人（マサヨさん）の姿をとおして生活改善グループの一つのあり方を描いたものである。

映画では、グループの組織と運営について以下の事項を深く描いていない。

- ・クラブの発足の経緯
- ・クラブを組織し、運営の中心となる指導的な役割を担う個人像
- ・農業改良普及事業あるいは社会教育事業からの働きかけ
- ・農協などの関連組織との協力関係

強調されているのは、この運動が、婦人たち中心に活動し、台所改善に必要な費用が婦人たち自身の手で賄われたこと、この運動をとおして個々の婦人の意識が高められ、組織的な力の素晴らしさを認識したこと、そして婦人自身でなした達成感、満足感である。

この映画は、板ガラス協会の企画による生活改良普及事業の啓発であり、台所改善活動を中心に

構成されている。伝統的な農家の暗い土間、そこで家事をこなす農村婦人、そして女性の積極的な社会参加をよしと思わない風習、生活改善運動は、暗い土間に窓をつけ、光さしこむ明るい台所に改善することをとおして、農村婦人の社会へのかかわりを促進し実感する、との考えに基づいている。では、なぜ生活改善運動の現場では、改良カマドの普及一步進めて水道、流し台、収納などの台所改善が主要な活動となりえたのか、ということである。

農業改良普及事業は、農業改良の主体者は農業者で、彼らの能力を高める援助を関係諸機関が指導、助言し、農業の発展と農家生活の向上をはかる、との認識で事業が展開されてきた。したがって、生活改善運動は、農民の自主、自律的な運動ではなく行政レベル（国や県）の働きかけを、農民が受け止め、現場が創意工夫を加え実施してきた。事業そのものは、教育的手法によって「自ら考え行動する、自主的な農業者」を育成することをめざした。

生活改善の現場では、多種多様な取り組みがなされてきたが、具体的な取り組みの多くは基本消費に係る生活の側面であった。基本消費は、健康な身体を前提とし、いわゆる衣食住に係るもので、学問領域からみると家政学や生活学の領域にあたるものであった。この基本消費は、社会生活を営む基本的な単位としての「家族」の領域に深く関与し、「社会」の領域である諸問題と質を異にする。生活改善運動は、日常性の中に埋没する家族領域の問題を、既存の組織とは一線を画した組織をとおして社会の領域に引き上げ、意識化し問題の解決に導く取り組みであった。

「食」を支える調理の場である台所の作業環境は、「家族」の領域の問題の一つで、私的なものとして位置づけられるが、生活改善運動ではこの問題を組織の活動として公にし、社会的な問題としてとりあげた。この運動では、少なくとも台所を中心とした生活技術の合理化、目標を設定した生活経営、自己主張が実践的な活動をとおして涵養され、農村婦人の家族内の立場と発言力を高め、個々人の精神的世界が拡大に寄与したことは確かである。確かにグループによる活動は、公益的な取り組みであるが、具体的な活動の成果は、個人の願望がかなう、家族の領域に係る私益的な側面として位置づけることもできる。生活改善運動ではよく活動の成果として改良カマドが象徴的に語られるが、活動の成果として目に見える形でのこるカマドは家の領域に置かれ所有される。活動の方向は公益でありながら、その成果品には物質的な願望を背景にもつ私益的の要素があることは否めない^{注3)}。このため生活改善運動では形になった成果が充足すると、つぎの成果品を探すことになる。『窓ひらくの』では、後半の会合で台所改善がいきなり、つぎの活動を模索するシーンは、一見活動の拡大とも見てとれるが、活動の範囲が基本消費にかかわっていたため、活動によって一つの欲求が充足されると次の取り組むというように、活動そのものにも消費的な側面を内包していた。

3 栗野村（映画）

映画『栗野村』は、東京シネマが1956年に制作したもので丸山章治が演出し、『窓ひらく』の吉見泰が脚本をてがけている。企画は東北電力で映画の舞台は福島県伊達郡栗野村（現伊達郡梁川町栗野）である。

映画は前掲の作品が生活改善運動における改良カマド中心とする台所改善であったのに対して、電化によって地域産業整備の促



写真14 映画『栗野村』タイトル

進を主題とし疑似ドキュメンタリー映画として仕上げている。

<映画概略>

戦後の1946年（昭和21年）にはじまった栗野村の電化計画によって村がどのように変容したかを1958年に一部再現して制作された作品である。畑作地帯である栗野村は、戦時中は食糧生産増大のなか麦と甘藷を栽培する農村であるが、戦後は麦の以外に果樹（リンゴ、モモ）、養蚕、野菜などの集約的な栽培や牛、豚、山羊、羊、家禽の家畜を導入して農業の多角を推進するモデル的村落として映画ではまず紹介される。



写真15 左：農家風景、中：麦刈 右：多角経営の一つ乳牛飼育

農業の多角的経営を推進するには、この地域の麦の収穫が梅雨にあたり、効率の良く脱穀しないと、雨にあたり穂発芽を起こす。それは従来の足踏み式脱穀機では、作業量が限定しこの問題には対処できない、という問題が設定され、農業協同組合を中心に電化によって生みだされる時間と労力をもって農業の多角化を実現しようとするストーリーが展開する。まず、農協の集会で電化が提案されるが、経済的な負担をとまなうため生活が苦しい農家数件が反対するが、できる者から進めるとの方針をとり施工にいたる。電化後、電動機モータを共同利用し、農作業の共同化を図った。その結果は、懸案となっていた脱穀をはじめ、精米、精麦、製粉、果樹園の薬剤散布、縄ないに利用した様子が記録されている。



写真16 左：足踏み脱穀、中：麦の穂発芽 右：農協の集会



写真17 左：電線敷設工事 中：電動脱穀機 右：多角経営の一つ電動機による精米、製粉事業

電氣の利用は、電気温床、養蚕の温度管理、家畜用飼料の裁断など個人での利用に広がり、社会的には、あらたな経済活動が起き、共同出資の孵卵場の運営、モータ専門店 パン焼き工場 製麺工場などのビジネスが紹介されている。同時に家庭生活においてもモータによる水道設置による水汲みからの開放、縄ない機を改造した洗濯機そして照明への利用と電化によって生みだされた時間と団欒に収束してゆく。

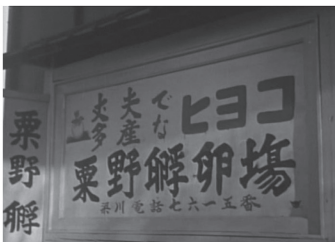


写真18 左：電気温床 中：電動飼料裁断機 右：電気孵卵機による事業

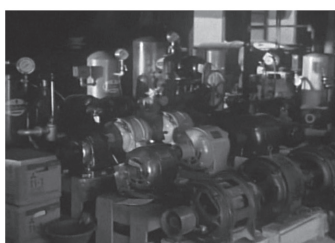


写真19 左：製パン事業 中：製麺事業 右：電動機の小売店



写真20 左：電動ポンプによる簡易水道 中：電動機利用の洗濯機 右：一家団欒風景

そして次世代をになう若者への電動機の技術的な側面を学ぶ姿が挿入され、最後に、畑作地域のこの土地を水田に変える試みとして地下からのよう揚水による畑地の水田化計画その成果として実りの田を背景に「電化を推進した共同の力」が語られ、映画は終わる。



写真21 左：電動機の学習 中：水田への灌漑 右：村の指導部

映画『粟野村』と開発近代化論

この映画『粟野村』は、東北電力が企画したもので、冒頭の麦の穂発芽の問題を人力による脱穀から、電動機を利用した脱穀に変えることによって問題が解決される。ナレーションでは、足踏み式で2週間費やしていた70～80俵の脱穀作業をわずか1日で終わらせることができることが強調され、人工のエネルギーである電気が、新たな農業経営の芽を育むことをアピールする。

電気という新たな技術とそのインフラを受け入れることは、農業技術的にもこれまでとは異なる発想をもたらすばかりでなく、社会にあらたな企業経営を起こすことを可能とし、さらには日常生活における利便性と快適性、そして家族の団欒を提供する、説いている。

利便性、快適さ、効率をもたらす近代化こそが、戦後わが国が直面していた農業の諸問題を解決するとされ、それをもたらす近代技術の諸相、ここでは電気がそれを可能とするとした、近代化論の立場から構成された映画といえる。これは、企画者の東北電力としては、近代化を支える電気エネルギーを、製造業を構成する2次産業の分野に加えて、これまで市場として意識されなかった農業という1次産業分野における利用消費の拡大は、企業経営として当然のことあり、映画制作の意図はここに帰する。一見すると電気を利用することによって農村の生活向上を目指す映画としてとらえがちであるが、近代技術の素晴らしさを説き、効率性を追求する近代化の価値を啓発する映画である、といえる。ちなみに、この効率性、利便性は、その後圃場という場では石油を利用する耕運機、トラクターなどの普及につながる。そして効率化によって生みだされた労働力の大半は高度経済成長下で都市部の2次、3次産業に流出し、農業の拡大再生産には大きく寄与しなかった。

4 忘れられた土地（映画）

映画『忘れられた土地』は生活改善の記録ではない。企画者の商業的な枠組みが明確な前掲のセミドキュメント風の2作品とは一線を画し、1958年に東京フィルムの自主作品的な映画として制作され、教育映画配給社から配給された。脚本・演出は野田真吉で、撮影場所は、青森県下北郡東通村尻労（しっかり）集落で1957年にロケハン調査を行い1958年2月と4月に撮影したものである。野田の制作ノートには、「尻労の人々、その他多くの方々の協力と支援で、やっと映画ができた」と

いえる。ただ、一つ心残りであるのはラストシーンにと思っていた秋の昆布とりの撮影が資金欠乏のため、できなかったことである。尻労の砂浜で、二米以上の大波にのって打ちよせてくる昆布を尻労の女の人たち、(それも中年以上の婦人でないとできない)が波をくぐりながら拾うすさまじい労働を撮ろうと思っていたのである。それは果たせなかった。点晴をかいだ思いはいまも変わらない。」とある。

<映画概略>

映画は小学校の卒業式、学校を卒業する若者が将来の仕事について「漁師になる」「百性する」「出稼ぎに行く」「おれも」「私も」と語るところからはじまる。彼らの生活する尻労部落の地理的位置、村落概況、自然環境、畑、水田、交通が概観されこの集落の置かれている厳しい現状、映画では、「いわゆる僻地、陸の孤島」と表現している現状が概観される。



写真22 映画『忘れられた土地』タイトル



写真23 左：尻労集落遠景、中：雪に埋もれる畑 右：浜と磯舟

女たちの水汲みからはじまる部落の一日を追う。細道を天秤棒のつるされたバケツの水を運ぶ女。家では漁に出る男が一人食事をする。水汲みから帰ってきた女、時計は早朝の4時前をさす。まだ眠る子どもの寝顔。漁に出る男をおくるために二人して家を出、浜に向かう。二人して陸揚げしておいた磯船を海に浮かべる。



写真24 左：婦人の水汲み 中：朝食をとる夫 右：磯舟を海に下ろす

漁にでる男。見送る女。女はその足で畑に向かい子どもの起きる朝食まで耕作をする。漁にでた男が乗る磯舟が波間に見え隠れする。大資本による大型漁船の進出によって零細沿岸漁業の先細りを説く。子どもたちを学校に送りだした女はまた畑に行き、鋤を使い耕す。鋤は子どもや老人には使えない。重労働が女に降りかかる。一人黙々と耕す女。



写真25 左：漁 遠景、中：漁場の男 右：畑を耕す婦人

小中学校の風景。村の厳しい財政状況は、学校の援助に届かず、部落の人たちの援助を請う状況が説明される。少ない教材、教具、それを補う教師の情熱。



写真26 左：教室の子どもたち 中：教師 右：オルガンの使い回し

漁から帰り疲れ果てて眠る男。耕し続ける女。学校から帰ってくる子どもたち。幼子の子守をする老女。



写真27 左：漁の疲労で眠る男 中：鋤で耕す女 右：子守の老女

海岸の打ち寄せる波、その波が運んでくる海草を次の波が来る前に採る子どもたち。

子どもを背負い年下の者と砂浜で遊ぶ男の子、水路で遊ぶ女の子。果てしなく耕し続けるために、子どもたちを顧みることができない女。歳が上の女の子は家事の手伝い。ジャガイモを洗う。



写真28 左，中：砂浜で遊ぶ子どもたち 右：家事をする少女

日が暮れ、家路につく女たち。荒れ狂う海。ストーブを前に酒を飲みながら漁業の将来を語る男
「金があれば船を買える。港も作れる。…漁師で暮らしが立つならやりたい。」

昔は魚がたくさん取れた。お宮に掲げてある絵馬のようにと。



写真29 左：家路に向かう婦人 中：漁師の独白 右：宮に奉納された絵馬

漁師の男の顔のアップが荒れ狂う海の風景のなかにインサート、昔のような漁はない
春、岩手からやってきた船団のマス、マグロの大謀網漁（定置網の一種）が行われる。

船団の漁師の大半は岩手の出稼ぎ漁民。大謀網の引き揚げ作業、網に踊る魚 それを陸からみる
漁師たち、魚は八戸などの水揚げ港に運ばれる。



写真30 左：大謀網漁 中：網をあげる漁業労働者 右：陸から漁を眺める男たち

戦前の部落の北側の山で石灰石が採掘され船積みされた港湾設備の廃墟。戦後日本製鉄が採掘を
はじめるが採掘場は、津軽海峡側にできる。そこに広がる近代的設備がと整った港、ベルトコンベ
アで運ばれる鉱石は室蘭の製鉄所へ。



写真31 左：戦前の工場港の跡 中：運ばれる石灰岩 右：近代設備の積み出し港

4月学校の子どもたちの海草採り。販売して教具教材の費用を賄う。学校あげての海藻採りの作
業、俵につめ運び、乾燥する。そして手に入れたバレーボールで遊ぶ子どもたち。



写真32 左：海藻採りの子ども 中：海藻の乾燥場 右：購入したバレーボールで遊ぶ

朝礼の風景 新聞の記事で村の学校の現状が紹介され、反響を呼び、全国から励ましの手紙や本などが送られてきた。それに対する礼状の朗読。穏やかな砂浜でお礼貝殻ひろいをする子どもたちのシーンが挿入される。



写真33 左：朝礼での朗読 中：全国から寄せられた本 右：お礼の貝を拾う子ども

村の厳しい農業環境 やせた土地へのジャガイモの植ええの作業。漁業の衰退によって 女の行う農業への期待が語られる。海霧（ガス）に霞む海 山 集落、浜 畑。女が鋤一本で耕した畑の連なりのシーンのなかに、女「父ちゃんはまだ漁のことを思っているし、もう少し畑を広げれば…」との独白が挿入される。



写真34 左：ジャガイモの植え付け 中：海霧（ガス）にけむる村 右：女の耕した畑の連なり

5月から12月をめどに出稼ぎに出る男や若者たち。トラックにつまれる旅支度の荷物。男は八戸などの漁業労働者、女や卒業したばかりの若者は営林署の防砂林工事に行く。荷台に乗り込んだ出稼ぎに行く人、それを見送る村の女、子ども、老人。そして次の日も出稼ぎの人びと乗せたトラックが走る。



写真35 左：出稼ぎ 中：村での別れ 右：荷台に乗り出稼ぎに行く

残された老女と子どもたちの食事風景 その脇に置かれた陰膳。

再び冒頭の中学校の卒業写真のシーン。若者たちの未来をと語るには厳しい現実が、これはここだけの問題であろうか、と見る側に問いを投げかけて映画は終わる。



写真36 左：村に残った家族 中：出稼ぎに行った人への陰膳 右：中学校の記念写真

映画『忘れられた土地』とドキュメンタリー

『忘れられた土地』は、青森県尻労部落を人びとが厳しい自然条件や近代化あるいは市場経済化の進む社会のなかで漁業と農業を軸として生きることの難しさ映しだしている。この映画は農業改良事業や生活改善運動そのものを主題としたものではない。半農半漁の集落で生活を送る人びとが直面している困難を、自然に係る生業と技術、社会・経済的な構造と社会の動きを構造的に映像化することを意図している。前掲『窓ひらく』と『栗野村』が伝統的な因習にとらわれた生活の貧しさは、集団の力や技術力によって新しい生活の入口となる、という明らかな対策と展望が意図されて制作されていた。したがって一見ドキュメンタリー的な構成をもつが疑似ドキュメンタリー映画であった。この疑似ドキュメンタリー映画は、1950年代後半に映像表現の一つとして多くの作品で取り入れられていた。

映画とは、一つのフーテージ（撮られた素材）、それからなる一つのシークエンス（まとまった意味された映像）そしてそれらを構成した作品である。フーテージそのものが演出によってはあらかじめドラマのように創られる映画なら、ドキュメンタリー映画とはいいがたい。取り上げた二つの映画が疑似ドキュメンタリー映画というのは、多くが語られてきた出来事を脚本家が再構成しイメージしたものであり、そのフーテージはテキストとして仕上がっているからである。ドキュメンタリー映画とは、撮影現場のコンテキストをどのように理解し、その映像シーン一つ一つのもつリアリティーを演出家自身がどのように噛み砕き理解し構成するかにある。

『忘れられた土地』は、その意味でドキュメンタリー映画であるといえよう。中学生の卒業記念写真、畑で働く女の独白、酒を飲みながらの漁師の語りなどが、方言ではなく標準語に置き換えら

れていること、大型船団による漁の様子を眺めるシーン、出稼ぎの別れテープなどに演出が見え隠れするが、ロケハンを含め3ヶ月におよぶ現地住み込みによる映像には、村の人びとカメラをとくに意識することなく振舞う姿が映しだされ、撮影クルーとの信頼関係が醸成されていたことを感じさせる。

男と女凄まじい労働の姿、磯舟を操り、漁をする男、とくに全編で登場する鋤を用いて耕す女のシーンには、生業で鍛えられた身体動作が迫力を超えて見る側に感動すら与える。幼子の子守をする老女、小さな子を背負い遊ぶ男の子、一人家事をこなす女などの映像で表現される男女、世代は、分業し生活に立ち向かう姿であり、生活改善運動の背景にある思想の一つである「女性である自己を抑圧する存在である男性あるいは伝統的因習によって他者化されてきた自己」とはこの映画ではとらえていない。むしろ、厳しい自然環境で営む日々の生活とそれを支えるために身体に沁みこませた技術をもっておこなう労働の過酷さと、戦後の高度経済成長による社会的経済的変化がいやおうなしに、いわゆる僻地といわれたこの地を飲み込み、その結果さらなる周縁部に追いやってしまう社会状況にこそ問題がある、と投げかけている。それは、高度経済成長の大きなうねりが、一次産業である漁業や農業にたよった生活が限界に近く、集落の経済は外部との結びつきを強めるしかない状況を作りだした。その選択肢が出稼ぎであった。出稼ぎの人たちがトラックの荷台に乗り、集落から外の世界をつなぐ小さなデコボコ道を進むシーンに集約されている。あたかも「もの」が運ばれてゆくように。しかし、集落に残された人々は、出稼ぎにでた者たちを日々忘れることなく家族の者と常に一緒にいることを、この地で生きてきた老女の節くれた手で給仕する陰膳に託す。そして最後に中学の卒業式の記念写真のシーン、高度経済成長に入った社会で人びとが選択する生き方を、その社会に飛び込む若者の姿を重ね合わせ、映画を観る側に個々人の問題として投げかけている^{注5)}。

Ⅲ 生活改善運動における女性像と映像表現—結語にかえて—

戦後、農業改良助長法の制定を受けて関係諸機関が「自立し考える農民」「安定した農業経営」「開かれた農村」をめざした。戦後農業の復興計画は、都道府県単位で農協など各種農業団体が参加した会議のなかから、農業復興会議などを組織した。その一つ愛知県は、1948年（昭和23年）生活改善対策委員会を設置し意志交流、啓蒙等運動の推進を議論している〔家の光編1999：pp. 87-90〕。地域によって時間的な差はあるものの1950年（昭和25年）には、ほぼ全国の市町村に農業改良普及員が着任し、それぞれの地域で活動を開始した。

生活改善運動の経緯から判断すれば明解であるが、この運動のはじめは、農民の自主的な運動ではなく国、県レベルの行政機関の働きかけを、農村が受け止め展開したものである。戦後の疲弊した農村をどのように改革するかは当時の内政の関心事の一つで、農村地域の公民館活動、小中学校教育の現場、保健所なども働きかけを行った。そこでは、農村が、貧困あるいは豊かになれない原因を伝統的な習慣にとらわれた社会、合理性に欠ける因習に縛られた社会、革新性を嫌う傾向をもつ社会であると位置づけた。結果、伝統的な社会規範や慣習に従った生活、父系社会における政治的機構や権力への追従、知識不足であり、状況として社会は停滞し、新たな変化に対応できない豊かさとは縁遠い状況を呈していると認識した。この状況を変える対策が啓発をとおした生活改善運

動、地域保健・公衆衛生活動、公民館活動の活性化、支援、指導であった。このことによって農家の社会経済レベルの向上を図るという展望を前提とした枠組みを作りあげた。

1954年（昭和29年）鹿児島県が一連の県政ニュースとして制作した3本の映画は行政の適切な指導、助言、援助と住民の協力が、各種取り組みの成果として実を結んだものとして制作・上映されたものである。生活改善運動がおもに農村婦人を対象に活動を展開したが、貧困からの脱却は、男女を問うことない農業改良普及事業、農業共同組合の組織改革、公衆保健衛生の活動を重層的に行うことによって成果がえられる、とした。『あすは明るく』（1954）では生活改善を支援する農業改良事務所と生活改良普及員が、『みんなの力で』（1954）では農業協同組合の再建^{注5）}が、そして『明るいくらし』（1954）では環境衛生の立場から保健所が、活動を支援、推進する行政の中心として描かれている。

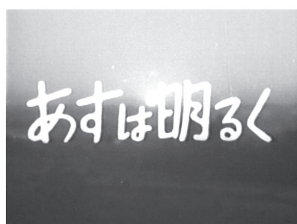


写真37 『あすは明るく』（1954） 農業改良事務所と生活改善運動の集会



写真38 『みんなの力で』（1954） 農業協同組合ポスターと共同作業



写真39 『明るいくらし』（1954） 保健所の事業標識と共同作業

農業改良普及事業は、おもに農業経営の技術的な指導を農業改良普及員が、農家の生活改善を生活改良普及員が担当した。生活改善の運動の方向は農村婦人を組織し活動を展開することからはじめられた。この過程で重要なことは、前述したように農民の自主的な運動ではなく行政機関の働きかけを、農村が受け止め展開したことにある。働きかけを行ったのは、農業改良普及所のみならず、

農業共同組合、公民館などであった。農協婦人部の貯蓄増強運動、更正貯蓄運動、婦人会など既存の運動体を母体に参加した組織もあるが、いずれにしても活動の趣旨に賛同し、参加する者を組織し、それを運営する指導者的な存在が必要とされた。指導性は、強く組織を牽引するというよりは、調整型の素養が求められた。活動を主導した人の多くは、教員、農協職員、農業技術員、帰農者、高等教育の背景もつ者などで純農民ではなく、非農民的な素養もつ者が多かった。活動は農業改良普及所との連携、具体的には生活改良普及員からの援助、助言を受けており、その内容は農業改良普及事業や社会教育につながる公益性が求められた。

現場における活動では、農村が豊かになれない原因と結果を、行政機関がしめした問題認識を踏襲し、活動は現場の実情に合うようにアレンジされ、多様な取り組みが展開された。この過程で伝統的な社会規範や慣習に従った生活を余儀なくされているという農村婦人像が運動の象徴的なイメージとなった。生活改善運動を啓発するスライド、映画などの構成は、問題提起（生活の現況をもたらした原因）とそれを解決するための対策（いわゆる科学的なあるいは合理的な見解の提示を含む）であり、個々の活動とその成果をモデル化していった。例えば普及啓発活動の現場を支えたスライド『生活改良普及員の一日』（企画：農林省農政局、制作：農山漁村文化協会、1957）『伸びゆく生活改善グループ』（企画制作：鳥根県農業改良課、発行年不明）はこれにあたる。

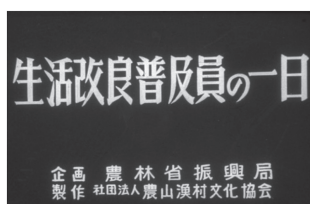


写真40 スライド『生活改良普及員の一日』タイトル



写真41 スライド『伸びゆく生活改善グループ』タイトル

映画『腰のまがる話』は農林省が企画指導したドラマで、そのストーリーの展開は伝統的な社会規範や慣習に従った生活から目覚め、組織をとおして結実する。最後は組合活動に否定的だった夫の理解をえるという判で押したような展開である。映像のイメージは、言説的な認識の上に立って作られている。



写真42 『腰のまがる話』（1949）企画指導は農林省 右：夫と妻の対立

『刈干切り唄』は、宮崎県高千穂町の農村を画家である都会人が巡り歩く紀行紀風に仕立てられ

た映画である。映画では都市の視点からみた農村生活の後進性が映しだされ、そこから脱却しようとする取り組みとして改良かまどを設置するシーンが挿入され、生活改善運動の主要な活動であった台所空間の改善が農村近代化の象徴として扱われている。映画は厳しい生活環境にある農村にも高千穂神楽という文化的な芸能が息づいている、とまとめて終わる。



写真43 『刈干切り唄』（1959）伝統的なカマドとそれを壊す

生活改善運動は行政機関の働きかけを農村が受け止め展開したことにある。この結果、生活改善運動は、主体となった農村組織の運営手法と成果いたる過程を中心に語られるようになった。特徴的なのはこの活動が日常生活における衣食住と健康に係る基本消費に深く関与する婦人たちの領域に特化し、運動の全過程が婦人たちの手による活動であるということ、さらに活動を支える経済的処置を活動に内包させていたことにあった。この活動をとおして体得した個人的な経験は、つねに具体的であり、話題の中心に「私」あるいは「私たち」が位置するという私的な領域の体験談を可能とした。結果、個々人の経験談に行政の目的的な指導援助は薄れ、活動態としての集団の自律性が強調された。なによりも活動が生活と密着した問題の解決をめざしており、具体的な形となった成果物は、個々人の家庭生活に反映され、私益的な利用を可能としたため、活動の体験談は具体性をますますおび、語られた。

啓発用の図版、スライドや映画には、生活改良普及員への相談という表現をとる作品もあるが、多くは自律的な集団によって活動が運営されてゆき、集団による自律的な活動が成果を招いたというストーリーの展開をとっている。前掲のスライド『一色村』映画『窓ひらく』は、台所生活の技術の合理化、実現に向けた自己主張など従来の思考の枠組みを再編する機会を自律的な集団の運営のなかで意識化してゆく過程が強調されている。

なお、この運動を推進する生活改良普及員には、時代の変化にあった指導マニュアルが用意され、この運動の推進は行政の側にあることが確認できる、例えば、啓発に利活用された視覚資料をもとに農林省農政局普及課が1969年にまとめた『図説生活改善』の巻頭には「視覚教材の充実と活用のためにこの指導書を作成した」と「指導」の文字が記述されている〔農林省農政局普及課編1969：p1〕。ちなみに図版化された指導のテーマは、暮らしのバランス、食生活の工夫、私たちの暮らしと貧血、主婦の疲労について、生活の予定を立てよう、農家の経済について、農村の生活共同施設と自宅改善（個室化の工夫）であった^{注6)}。

生活改善運動は、基本消費から派生する問題に取り組み、改良カマドなどの具体的な成果物を作り、それを日常生活に利用した。この経験をとおして、家庭あるいは社会における女性の発言力と地位を高めたことは確かである。また新たな価値観で結ばれた組織を作りあげ、集会という非日常

的な楽しみの場、組織が生みだす共同の力を体験し、自己の変化を知ることにもなった。その意味では、自己を社会の中で相対化し自己の主張を可能とする「主体性」あるいは「民主性」が涵養され、文化運動として一定の成果をあげたことは間違いない。しかし、視点を変えてみるなら、この運動が集落あるいは地域規模で実施されており、その人間関係は大きく変わらず、新たな組織における「関係性」の再構築あるいは再確認の場としてとらえることもできる。この運動は「主体性」を追求する西洋近代思想の個人主体主義（あるいは実存主義的ともいえる）の立場から「自立して考える農民」を育もうとしたが、運動では「関係性」を重視した「社会参加」と具体的な成果をとおした「自己発見」という、相互関係性の強いパラダイムが表出していた、といえる。

活動対象が基本消費にあることは、ある時点で欲求は充足され、さらなる課題を探し求めなければならぬことを抱えていたことも事実である。その意味で活動自体に消費的性格が内包されていた。活動がもたらした成果物は、多くが私益的に使え、集会が作りだした「楽しみ」とともに活動の充実感を得ることができたが、同時に、この活動を継続するには今までの取り組みとは異なる活動を模索する必要があった。活動は、製パンなどの栄養改善、労働と身体疲労に対する対処を含む保健衛生、家族経営、活動を支える作業所な共同施設などに拡がっては行くものの、その方向性は個人あるいは家族の方向を向いていた。農村や山村の貧困の生みだしている社会的政治的な構造に目を向けるにはいたらなかった。なぜなら農村が都市の周縁部におかれている現状や貧困から脱却できない現状を認識し社会変革に向けた思想的な解放をこの運動自体に内包していなかったからである。

1960年代社会は高度経済成長に入り農村の担い手の多くが都市部へ流出し、農民から労働者に変節した。農業経営は、出稼ぎあるいは兼業なしに維持することが難しくなった。さらに国際的な規模の市場経済化の進展によって農業自体の存続、地域によっては農村の社会的機能そのものが機能不全をおこし、場合によっては消滅の危機に直面する現状を迎えた。この歴史のなかで農村からは、米価の決定や不作時における政治陳情はあったが、生活改善運動の中から主導的に政治経済、社会、文化のパラダイム転換を試みる発言はなかった。生活改善運動は、農村を変える大きな社会大衆の運動としての発展性を持たなかった。

生活改善運動をあつかった映画やスライドは、一部の作品を除き運動の枠組みを超えて農村、農民、農業が抱える問題の本質を社会に問うことはしなかったし、できなかった。この運動をテーマとした映画も企画者としての企業論理、制作会社による撮影・編集機材の独占のなか、多くがその表現に限界があったこと露呈している。こうして、一定の枠組みの中で撮られた農村婦人像は、一定のイメージに言説化されていった。

注

- (1) 第二次世界大戦以前に行われた農村漁村経済更生運動においても農業技術普及と生活改善的な取り組みがなされ、生活意識の見直しが取り上げられている〔森、1998〕〔佐藤幸也、2006〕〔農業学校長協会、1933〕。
- (2) 生活改善運動は、2000年を前後して途上国の貧困対策を議論する開発学の分野で、参加型開発が議論される過程で再評価された。開発論は、その潮流に開発する側と開発をされる側とい

う二項対立の図式で議論が交わされてきた。しかし一人一人の個性が強く表出し多様性に富む村落レベルの現場では、従来の理論的枠組みを当てはめて活動を展開しても対応できない現実が起きていた。これを越える枠組は、現場にいる地位、役割の異なる全ての人びと（ここではこれまで開発する側の人間もその一員として位置づける）の相互関係をとおして展開される共同行為の中から生まれたもの、あるいはその過程から醸造される世界観の変容を重視する、とする考え方であった（小國 [2003] 実践活動と調査をもとにした深い議論は示唆に富む）。現場で開発を提供する側の者は、ファシリテータとして黒子的な存在として振舞うという姿勢である。ファシリテータを生活改良普及員に置き換えると、生活改善運動の展開に類似することがある、という前提で議論され、生活改善運動で蓄積されてきた問題の気づき、組織運営、活動手法、まとめの手法などの経験知は、途上国の開発に寄与する可能性があるとされている、という前提で佐藤寛 [2002]、水野 [2002] などが積極的に取り上げ、議論されている。これを受けて開発の現場では、思考錯誤しながら利活用を進めている（吉田、浅田 [2008] などその成果を検証した報告も登場してきた）。

開発を支えてきた社会科学的な理論とその変遷については川田順三編集した岩波講座『開発と文化』[1997]で、近代化論[村上、1997]、弱者の政治的社会参加[清水、1997]などによって包括的な議論がなされた。また、トダロ [1996] が経済システムからの視点、佐藤寛 [1996] が人間の潜在力とその発現の立場からも議論を展開している。

1990年代、開発活動の現場では、持続可能でこれまで開発の枠組みの外側に置かれていた女性や社会的弱者を取り込み住民とともに開発を展開しようとする参加型開発とその手法の確立を模索した。そのため生活改善運動の経験知を開発にどのように活用するかは、国際協力事業団（JICA）が1990年代の初頭にこの問題に取り組んでいる[国際協力事業団、1992、1993、1994]。なかでも参加型開発は、Chambers [1994a、1994b] などによってPRAなどのファシリテーションの手法が提唱され、現場での利用が広がった。

開発の視点から見ると生活改善運動は、女性を中心として生産性、持続性、透明性を保った目的的な啓発活動によって運営されてきたが、参加型開発の広がりとともに生活改善運動を見直しする動きがおきた。太田 [2002] はこの運動の変遷と現場でなされた手法の開発学的解析を行った。また佐藤寛、水野を中心とした国際協力事業団の研究グループが問題を整理、議論し、一連の研究成果を出版した[国際協力事業団、2002a、2002b、2002c、2003a、2003b、2003c、2004a、2004b、2004c、2004d、2004e]。さらにDVDメディアによるマニュアルの制作も行った[国際協力機構編、2005a、2005b、2006、2007]

- (3) 台所改善は、日本生活学会編 [1999]、古島 [1996] など第二次世界大戦前から都市部を含め多く議論がなされ、近代的な生活の代名詞的な扱いを受けてきた。生活改善運動においても目に見える成果として着目され多くの取り組みがなされてきた。そのマニュアルは行政では農林省改良局生活改善課（発行年不明）、在野の出版ではPODOCO [1959] などから幅広い情報が提供された。
- (4) 『忘れられた土地』を演出した野田真吉は、同じ制作会社とスポンサー（東北電力）のもと山形県村山市を中心に雪国に生きる人びとの日常生活を撮った映画『この雪の下で』（1956）（写

真3)を制作している。作品ではスポンサーとの関係を電気がもたらす生活の利便性をあらわすシーンとして挿入しているが時間的には極めて短いシーンであり、基本的にドキュメンタリーの手法を全編にわたって貫いている。『忘れられた土地』は文中でも触れたように東京フィルムが自主作品として制作したもので、スポンサーシップの枠から離れ、映像作家として自由に創れた稀有な作品であった。当時の映画資本と映像作家との関係は、撮影機材、制作費の面で今日より格段厳しい状況にあったことは、この種の作品を観て分析するさいには留意することが必要である。

- (5) 明治以降の近代化の過程で行政主導の農民組織は、1899年(明治32年)に農会法の制定によって県、郡、市町村段階に農会が設立された。農会は、参加に制限を加えたわけではないが、地主層、富裕な農民層を中心に組織された信用組合で、その全国組織となる帝国農会は1910年に誕生した。1922年(大正12年)新農会法により会費の強制徴収が可能となり、組織基盤の強化が図られた。1930年代の世界恐慌で加速した農村の疲弊に取り組んだ経済更生運動は、信用、販売、購買、農業施設等の利用事業を強化した産業組合の設置を推進し、国によって強力に指導された。戦争による食糧供給の悪化は、農業団体法の成立をきき、農会は産業組合と合併し農業会(1943年：昭和18年)となり、翼賛の体制化に組み込まれた。戦後農村は、農地改革で土地が細分化され、生産性が低下したことは確かであり、同時に食糧の確保も難しかった。食糧の増産と安定供給は、生産を担う農民の組織化にあるとしたGHQの強い指導のもとに農業協同組合の組織化がいそがれた。結果戦前の組織である農業会を基盤とした組合が多く発足し、その組織運営は旧態のままであった。そのため経営の破たんも多かった。映画では、放漫な経営と説明されている。
- (6) 生活改良普及に係る資料は国や県単位でマニュアルとして数多く出版、配布されている。例えば群馬県〔群馬県農政部農業技術課、1967、1971a、1971b、1973、1974〕、広島県〔広島県農業技術課、1950〕などの例では、普及活動に取り組む姿勢を平易な表現で解説している。最近では、農村漁村女性・生活活動支援協会〔浜田編、1987〕や生活全国農業改良支援協会より普及指導関係資料がある〔関東ブロック普及活動研究会、2001、2006、2007〕。

*文部科学省 科学研究費補助金：基盤研究(B) 19320140「映像に記録された女性像に関する文化人類学的研究」の成果の一部です。

引用参考文献

Chambers. R.

1994a The Origins and Practice of Participatory Appraisal. *World Development* 22(7) : 953-969

1994b Participatory Rural Appraisal (PRA) : Analysis of Experience, Appraisal. *World Development* 22(9) : 1253-1268

チェンバース, ロバート

2000 『参加型開発と国際協力：変わるのはわたしたち』(野田直人、白鳥清志監修)、明石書店

古島敏雄

1996 『台所用具の近代史』 有斐閣

群馬県農政部農業技術課

1967 『農村主婦の賃労と家庭生活への影響』 群馬県農政部農業技術課

1971a 『総合生活診断について』 (生活改善普及活動資料 共通46-6)、群馬県農政部農業技術課

1971b 『みんなで育てよう若妻集団活動』 (生活改善普及活動資料 共通46-11)、群馬県農政部農業技術課

1973 『若妻グループ育成』 (生活改善普及活動資料 共通48-10)、群馬県農政部農業技術課

1974 『農家生活技術リーダー講習のまとめ』 群馬県生活改善グループ連絡協議会

浜田陽太郎編

1987 『これからの普及事業をどうすすめるか』 農山漁村女性・生活活動支援協会

原 洋之介

1997 “現代の開発思想” 「今なぜ開発と文化なのか」 川田順三編、岩波講座『開発と文化』 pp. 61-57、岩波書店

広島県農業技術課

1950 『暮らしのしおり』 広島県農業技術課

家の光協会編

1956 『台所改善よりみたる文化普及活動に関する調査』 家の光協会

関東ブロック普及活動研究会、

2006 『一新任者のための一普及員ハンドブック』 関東ブロック普及活動研究会、全国農業改良支援協会

国際協力事業団

1992 『農村生活改善のための女性の技術向上検討事業報告書』 1次、国際協力事業団

1993 『農村生活改善のための女性の技術向上検討事業報告書』 2次、国際協力事業団

1994 『農村生活改善のための女性の技術向上検討事業報告書』 3次、国際協力事業団

2002a 『農村生活改善協力のあり方に関する研究』 検討会報告書』 第1分冊、国際協力事業団

2002b 『農村生活改善協力のあり方に関する研究』 検討会報告書』 第2分冊、国際協力事業団

2002c 『農村生活改善協力のあり方に関する研究』 検討会報告書』 第3分冊 国際協力事業団

2003a 『農村生活改善協力のあり方に関する研究』 検討会第2年次報告書』 第1分冊、国際協力事業団

2003b 『農村生活改善協力のあり方に関する研究』 検討会第2年次報告書』 第2分冊、国際協力事業団

2003c 『農村生活改善協力のあり方に関する研究』 検討会第2年次報告書』 第3分冊、国際協力事業団

2004a 『農村生活改善協力のあり方に関する研究』 検討会第3年次報告書』 第1分冊、国際協力事業団

2004b 『農村生活改善協力のあり方に関する研究』 検討会第3年次報告書』 第2分冊、国際協力

事業団

2004c 『農村生活改善協力のあり方に関する研究』検討会第3年次報告書』第3分冊、国際協力事業団

2004d 『農村生活改善協力のあり方に関する研究』検討会第3年次報告書』第4分冊、国際協力事業団

2004e 『農村生活改善協力のあり方に関する研究』検討会第3年次報告書』第5分冊、国際協力事業団

国際協力機構

2005a 『日本の生活改善の経験』国際協力機構

2005b 『彩（IRODORI）：木の葉の里の元気づくり』国際協力機構

国際協力機構 筑波国際センター編

2007 『技術協力コンテンツ「生活改善アプローチ」視聴覚教材』国際協力機構（筑波国際センター）

共同農業普及事業五十周年記念会

1998 写真集『写真でたどる農業と普及事業の50年』共同農業普及事業五十周年記念会

水野正己

2002 「日本の生活改善運動と普及制度」『国際開発研究』11(2)：39-52

森 芳三

1998 『昭和初期の経済更生運動と農村計画』東北大学出版会

村上陽一郎

1997 “開発と科学技術”「今なぜ開発と文化なのか」川田順三編、岩波講座『開発と文化』pp 117-130、岩波書店

農村生活改善協力のあり方に関する研究会

2006 『開発ワーカー必携！生活改善ツールキット』[電子資料] Ver. 1. 国際協力機構農村開発部

農林省農政局普及課編

1969 『図説生活改善』農林省農政局普及課

農業学校長協会

1933 『農村を更生する人々』農業図書刊行会

小國和子

2003 『村落開発支援は誰のためか：インドネシアの参加型開発協力に見る理論と実践』明石書店

太田美帆

2004 『生活改良普及員に学ぶファシリテーターのあり方：戦後 日本の経験からの教訓』国際協力機構国際協力総合研修所（国際協力機構準客員研究員報告書）

PODOCO

1959 『農家の台所改善』井上書店

労働省婦人少年局編

1952 『農村婦人の生活』労働省婦人少年局

佐藤 寛（編）

1996 『援助研究入門』 アジア経済研究所

2002 「戦後日本の農村開発経験：日本型マルチセクターアプローチ」『国際開発研究』11(2)：5-24

佐藤幸也

2006 農村漁村更生運動に見る農民教育の分析：昭和恐慌下の農村における「中堅人物」育成を中心として」『岩手教育大学教育学部研究年報』66：pp 81-109

清水 展

1997 “開発の受容と文化の変化”「今なぜ開発と文化なのか」川田順三編、岩波講座『開発と文化』pp 153-176、岩波書店

全国農業改良支援協会

2001 『開発途上国における農業技術普及専門家のための手引き』全国農業改良支援協会

2006 『普及指導員養成マニュアル』全国農業改良支援協会

2007 『普及指導員のための道具箱』全国農業改良支援協会

下高井教育会社会調査委員会編

1964 『奥信濃の農村婦人』下高井教育会

トダロ、M.

1997 「開発経済学」岡田靖夫監訳。国際協力出版会

恒川 恵市

1997 “従属・開発・権力”「今なぜ開発と文化なのか」川田順三編、岩波講座『開発と文化』pp. 99-116、岩波書店

日本生活学会編

1999 「台所の100年」『生活学』第22冊、ドメス出版

吉田恒昭、浅田博彦

2008 『参加型開発における住民の選択と外部者の役割—ザンビア参加型村落開発プロジェクトを事例に—』独立行政法人国際協力機構（独立行政法人国際協力機構 客員研究員報告書）

参考映画資料

『腰のまがる話 婦人と農業共同組合』（1949）、演出：庵原周一、農林省、日本映画社、20min

『あすは明るく 経済自立映画 生活改善篇』（1954）、鹿児島県政ニュース16、鹿児島県広報文書課、日本映画新社、9 min

『みんなの力で 経済自立映画 共同販売篇』（1954）、鹿児島県政ニュース17、鹿児島県広報文書課、日本映画新社、9 min

『明るいくらし 経済自立映画 環境衛生篇』（1954）、鹿児島県政ニュース18、鹿児島県広報文書課、日本映画新社、9 min

『生活と水』（1952）、監督：羽仁進、厚生省、岩波映画製作所、26min

『栗野村』（1956）、演出：丸山章治、東京シネマ、30min

『窓ひらく』(1958)、演出：八木仁平、東京フィルム、30min

『忘れられた土地』(1958)、演出：野田真吉、東京フィルム、30min

『刈干切り唄』(1959)、演出：上野耕三、貯蓄増強中央委員会、記録映画社、43min

『風土病との闘い』(1962)、演出：菊池修、厚生省、桜映画社、27min

『住民参加による保健活動』(1981)、家族計画国際協力財団、桜映画社、18min